

清末政治小説理論における明治小説理論の受容

寇 振 鋒

1. はじめに

本稿では清末政治小説理論の形成における明治政治小説とその他周辺理論の受容について考察することにする。

清末政治小説の元祖梁啓超（1873～1929）は日本亡命前に、康有為（1856～1927）、嚴復（1853～1921）、夏曾佑（1865～1924）などの知識人と同じように小説の効力を多少認識したが、しかし政治小説の理論を形成する程度までには至らなかった。そのため、政治小説の理論レベルの論述にまで高まるには、梁啓超の日本亡命を待たなければならなかった。

明治日本においては、政治小説が登場してはじめて、小説理論が現われてきた。明治初の政治小説理論と言われるのは、「我国ニ自由ノ種子ヲ播殖スルー手段ハ稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルニ在リ」である¹。これはまた、「政治小説の季節の到来の告げるものであった」²政治小説論である。この文章の趣旨は、文学の改良を説くことにある。この文章は梁啓超への影響の可能性があるとは指摘されている³。そのため、本稿では、その他の影響の跡を追究したい。

清末の政治小説理論と言え、最も影響力の強かったのは、やはり梁啓超の「訳印政治小説序」と「論小説与群治之関係」の二つの文章である。日本到着後の梁啓超は、「訳印政治小説序」中で、「彼の米、英、独、仏、奥、伊、日本各国の政界が日に日に進歩するにおいては、政治小説の功績が最も高い。」と嚴復、夏曾佑の伝聞の説を更に確信のある口調で論じている。また、「飲冰室自由書」の冒頭では、「日本維新の運動に大きな功績があったのは、小説も亦その一端である。」⁴と書いている。このような明確な発言からも分かるように、明治日本に政治小説の影響の証拠を見つけていたと思われる。1902年11月に刊行した『新小説』の「発刊の辞」に代えた「論小説与群治之関係」は、成熟した政治小説論である。さて、次にこの二つの文章の主要な論点を取りあげて、明治日本からの受容と思われる四点を検討してみたいと思う。

2. 旧小説に対する否定について

「訳印政治小説序」中には、次のような指摘がある。

英雄を語るには『水滸伝』にならって、男女の恋愛を描くには、『紅樓夢』を踏襲する。盗を誨え、淫を誨えるという両端を出ない。

実は、日本亡命前の梁啓超が、『時務報』に掲載した「変法通議・論幼学」節中にある、『水滸伝』『三国演義』『紅樓夢』に対する評価は積極的なものであった⁵。しかし日本亡命後間もなく、梁啓超は完全に否定に急転し、『水滸伝』『三国演義』『紅樓夢』を「盗を誨え、淫を誨える」書と指摘した。文章ではまた、強国において、「各国の政界が日に日に進む」理由は、「政治小説の功績が最も高い」と指摘し、対比の角度から政治思想を含まない旧小説と決別する決意を表わしている。

なお、梁啓超は引き続き、「論小説与群治之関係」中で「わが中国人の状元宰相の思想」、「わが中国人の佳人才子の思想」、「わが中国人の江湖盗賊の思想」、「わが中国人の妖巫狐鬼の思想」はすべて旧小説の影響によったとする。そして旧小説を「中国群治腐敗の総根源である」⁶と総括して指摘し、社会政治が腐敗しているのは旧小説のせいだとする。このように彼は、旧小説を否定し、政治思想と密接な関係を持つ新小説を提唱した。

「訳印政治小説序」という小説理論の生まれる原因は、『佳人之奇遇』の漢訳が大きな契機となった。言い換えると、この理論は明治政治小説の実作『佳人之奇遇』を十分理解して、書いたものであると言える。梁啓超は、『佳人之奇遇』中の政治小説論とも言える、冒頭部分の第二篇に属する巻四の巻末にある漢文跋「佳人之奇遇跋」を看過できなかったであろう。

巻四の「佳人之奇遇跋」（望洋居士作）中には、次のような指摘がある。

抑東洋称小説者曰水滸伝、曰西遊記、曰金瓶梅、曰八犬伝。然水滸伝不過去伝草賊、西遊記則妄談不經、金瓶梅則猥淫無雜、八犬伝則怪乱荒唐、而且不免襲蹈之跟跡、非皆所以導人治世也、柴君佳人之奇遇則異此数種者、此可不読哉。⁷

この跋文は、対比の角度から旧小説と、新小説とする政治小説『佳人之奇遇』との大別を述べている。「草賊を伝える」、「妄談で道理がない」、「猥淫無雜」、「怪しくて乱れて荒唐」というような旧小説と異なる『佳人之奇遇』こそが、「人を導く、世を治める」小説であるということができるとする。

梁啓超が対比の角度から旧小説を否定した仕方は、巻四の跋と全く同じ論理と考えられる。この小説を翻訳していた梁啓超にとって、この母国語で書かれた漢文跋が、真っ先に目を引いたことであろう。それだけにとどまらず、この跋文からの影響によって、古典小説への態度が転換したと考えられよう。そこには明確な影響関係が存在すると思

われる。

つまり、これらの旧小説に対する否定の思想は、少なくとも、『佳人之奇遇』巻四の跋の影響を受けたことにより形成されたと考えられる。

3. 小説における新民の役割について

梁啓超は「訳印政治小説序」中で、英国人名士の口を借りて、「小説は国民の魂である」と指摘し、「飲冰室自由書」中で「またその国民の脳に滲みこむものに最も効力があつたのは、『経国美談』『佳人奇遇』両書が最高だという。」⁸と指摘した。両者はともに、小説と国民との関係を強調している。

1902年2月8日に横浜で梁啓超によって創刊された『新民叢報』に連載された、二十節にわたる長文「新民説」中で、彼は新民の重要性を力強く訴えていた⁹。それでは、一体どのようにしたら新民の目的を達成させられるのであろうか。この問題について、九ヶ月後の「新民説」連載の途中の1902年11月14日、梁啓超は『新小説』創刊号上の「論小説与群治之関係」の冒頭において、明らかにしている。

一国の国民を一新するには、まずその国の小説の革新が必要である。だから道徳を革新しようとするには小説の革新が、宗教を革新しようとするには小説の革新が、政治革新しようとするには小説の革新が、風俗を革新しようとするには小説の革新が、学芸を革新しようとするには小説の革新が必要である。そして人心を革新しようとするにも、小説の革新が必要である。

さらに文章の最後では「国民を一新しようとするならば、必ず小説から着手せねばならないのである。」と、強調している。

文章は一連の「新」を提出した。そのとどのつまりは、この一連の「新」がすべて小説によらなければならないのである。そして、この「新」という名を冠した「新」理論は、当時の明治日本にも類似の論述が存在している。例えば、中江兆民は「新民世界」という文章において、次のように論じている。

公等果て旧民の殻を脱することを欲せば造次にも顛沛にも唯此一の新の字を忘ること無く学問も新、文芸も新、農も新、工も新、商賈も新、法律も代言も芝居も料理も政治論も新聞も夫婦の交も親子の間柄も凡そ天下の事社会の物を把り来りて皆此一の新てふ意象を印捺せよ余輩は則ち公等を延ひて余輩新民世界の中に納れんのみ過而不改謂之過¹⁰

この文章は、中江兆民自ら主筆の『東雲新聞』に掲載された。この新聞は、最盛期の発行部数が当時最大の『大阪朝日新聞』に次ぐ第二位であったとされる¹¹。文章は、部落住民の立場から部落問題を論じた、「旧民の殻を脱する」という「民」を新しくするとした言説である。この「新民」は、小説に関する論ではないが、しかし「凡そ天下の事社会の物を把り来りて皆此一の新てふ意象を印捺せよ」という論点から見ると、「小説」も例外ではなからう。

この二つの「新民」の手段は違うが、その新民の目的は一致すると考えられる。両者の間に何か影響関係がないか追求してみたい。

先行研究によると、梁啓超が『清議報』と『新民叢報』に掲載した、少なくとも九つの文章は、中江兆民訳で、1886年に刊行された『理学沿革史』（フイエ著、中江兆民訳）によったとされる¹²。したがって、梁啓超は中江兆民の影響を受けたことが推測される。しかも中江兆民の文章は、引用した文章のように、同時代の明治人の中で圧倒的に漢語の比率が高く、文末の否定と肯定は必ず漢語で表現されている¹³。当時の中国人の間では中江兆民の訳書、著書は海賊版まで出版されていた¹⁴。なお、梁啓超の「盧梭学案」（「ルソー学案」）¹⁵も中江兆民の文章を参考にした可能性がある。こうしたことから、梁啓超が当時の思想の大家中江兆民の文章を読みあさった可能性も考えられる。以上のことから、中江兆民の梁啓超への影響関係、及び文章の類似性から見れば、「新民」についての中江兆民の影響について断言は下せないが、しかしその可能性は否定できないと、私は考える。

4. 「小説は文学の最も上乘である」について

梁啓超は、「訳印政治小説序」の中で「政治小説の功績が最も高い」と述べ、「論小説与群治之関係」中で、更に一歩進んで次のように、「小説が文学中の最上乘である」という観点を述べている。

ところが諸種の文章の中で、妙を極め、技を極めるものとして、小説にまさるものはない。だから小説は文学の最も上乘である、といわれるのである。

しかも、同日の『新民叢報』に掲載された「<新小説>第一号」の冒頭では、同じく「小説は文学の最も上乘である、近時、域外で学ぶ者は多くこのことを言うことができる。」¹⁶と指摘している。この「域外」は梁啓超自らが直接目の当たりに見た日本を指すと思われる。この、「小説は文学の最も上乘である」という言葉は、梁啓超が小説の地位を高めようとした意欲を表わすとともに、政治小説の核心的な言説となっていた。しかも、梁啓超のこの一言は、その後に与えた影響も強かった¹⁷。

先行研究によると、梁啓超の「小説は文学の最も上乘である」という観点は、坪内逍遙の「小説を論じて書生氣質の主意に及ぶ」中の「小説は美術である」という主張の啓発を受けた可能性が非常に高いとされる¹⁸。そして、明治日本からの影響については、次の二点も考えられるといえよう。

一つは、前に触れたように、梁啓超に日本語を教えた高田早苗が自ら、「我国に於ける西洋風の批評の元祖である」と自慢した「佳人之奇遇批評」中での言説との類似性を見てみよう¹⁹。

高田早苗は、英国批評家の「凡そ文章は大別して三種と為すを得べし」の説を借りて、次のような指摘をしている。

其第三種は筆力縦横或は勇壯なる傑士の如く或は艶麗なる美人の如く或は翁媪の如く或は児童の如く智なるが如く愚なるが如く賢なるが如く不肖なるが如く物として書き得ざるは無く事として写し得ざるは無く殊に小説院本の著作に適するものなりと蓋し泰西諸国に於て稗史院本は文章の最上乘と為す²⁰

高田早苗は、文章の筆力という点から「稗史院本は文章の最上乘と為す」と結論を出している。梁啓超も同じく諸種の文章の比較から、「小説は文学の最も上乘である」との結論を下した。両者の論点、論拠はほぼ一致している。前述した梁啓超と高田早苗との師弟関係から見れば、その影響の可能性はあると推測できる。そのため、「小説は文学の最も上乘である」という観点は、高田早苗からの影響を受けた可能性も考えられる。

もう一つ、「小説は文学の最も上乘である」という観点はまた、『国民新聞』に掲載された「『浮城物語』を読む」(内田魯庵作)という文章中の、「彼等は荐りに馬琴或はスコットの歴史的を標準として是を論ず、甚しきはヂスレーリーの所謂政治小説を尊崇して最上乘の文学となす」²¹、という言い方に酷似している。その影響関係があるかどうかについて、まず、梁啓超と『国民新聞』との関わりを見てみよう。『国民新聞』は、1890年2月1日に28歳の徳富蘇峰によって創刊された。日本到着後の梁啓超には、自らの「毎日『国民新聞』を朗読する(日誦国民新聞)」との証言がある²²。また梁啓超の「飲冰室自由書」では、かつて『国民新聞』に掲載された徳富蘇峰の言説をしばしば引用している。その『国民新聞』は、当時梁啓超の新知識の来源としてさかんに引用した雑誌新聞の一つであった²³。なお、『清議報』第97~100冊に連載された「帝国主義」という長文は、『国民新聞』(1901年11月5~23日)に連載されている「独醉居士」と署名した「帝国主義」の翻訳である²⁴。

「『浮城物語』を読む」(内田魯庵作)という文章は『浮城物語』に対して否認した態度を取っている。当時、『浮城物語』についての論争はかなりさかんであった。しかも、そ

の論争の文章はほとんど、梁啓超の新知識の来源となった『国民新聞』『国民之友』に掲載されていた²⁵。『浮城物語』とはすなわち、梁啓超が北京にいた時、すでに知り合いになった矢野龍溪のもう一つの政治小説大作であった。梁啓超は『佳人之奇遇』に出会った時から、政治小説を創作しようとした²⁶。そのため、梁啓超はこれらの論争にも目を通した可能性がある。日本と同じように、清末中国においても『浮城物語』はかなり注目されていた²⁷。また、梁啓超の「小説は文学の最も上乘である」は、内田魯庵と同じように政治小説の角度から論じられている。

以上から分かるように、内田魯庵の「所謂政治小説を尊崇して最上乘の文学となす」が、梁啓超の「小説は文学の最も上乘である」という観点に与えた影響の可能性がある、と考えられる。

5. 理想派小説と写実派小説の分け方について

梁啓超は「論小説与群治之關係」中で、理想派と写実派について次のように論じている。

小説というものは、人を別の世界にみちびいて、その人が平常経験する空気を変換させるのである。これがその第一点である。人は一般に、自分の考える想像や、経験した世界については、自分ではそれを行なっているが意識せず、察知しないことがある、哀れんだり、喜んだり、怨んだり、怒ったり、恋しがったり、驚いたり、心配したり、慚じたりしながら、それはそういうものであるとは知っているようだが、それがなぜそういうものであるのか、ということは知らない。その事情をそのまま書こうとしても、自分の心で描き出すことができず、口でいいあらすわすことができず、筆でつたえることができない。誰か別の人が、それをうまく表現して、あますところなく發揮していたら、案をたたいて、<うまい、うまい、そうだ、そうだ>と絶叫する。いわゆる「夫子これを言い、我が心に於いて、戚々たり」で、人を感動させることは非常なものである。これが第二点である。(中略) 前の説からは、理想派小説が出てくるし、後の説からは、写実派小説が出てくる。小説には種類は多いが、この二派の範囲外に出ることはできないのである。

この理想派と写実派については、梁啓超の独創の面が指摘されている²⁸。一方、「坪内逍遙の文学活動」や「没理想論争」の角度から「日本文壇からの影響の跡が押された」との指摘もある²⁹。ここでは、その影響の裏付けを探ってみたい。

先行研究において、「彼（梁啓超——寇注）が小説界革命を行おうとする以上は、日本小説改良の先駆者坪内逍遙の貢献に留意しないということはいえない。」³⁰と指摘さ

れている。坪内逍遙の最も大きかった貢献と言えば、『小説神髓』の発表である。なお、前に触れた梁啓超に対して啓発を与えたと見られている「小説は美術である」は、『小説神髓』の中心的論点である。

さて、『小説神髓』中で理想派と写実派についていかに述べているか見てみよう。坪内逍遙は『小説神髓』上巻「小説の種類」において、「つくりものがたり 仮作物語」を「きいものがたり 奇異譚（ロマンス）」と、「よのつね 尋常の ものがたり 譚（ノベル 小説）」に分けている。この分け方は、後ほど述べる尾崎行雄の「Novel」と「Romance」の分け方と同じである。なお、『小説神髓』下巻の「主人公の設置」中で、彼は引き続き次のように述べている。

主人公を造作する二流あり。一を現実派と称し、一を理想派と称す。所謂現実派は、現に在る人を主人公とするに在り。現に在る人を主人公とするとは、現在社会にありふれたる人の性質を基本として、仮空の人物をつくることなり。（中略）所謂理想派は之に異なり。人間社会にあるべきやうなる人の人質を土台として仮空の人物を作る者なり。

坪内逍遙は主人公の設置の角度から現実派と理想派に分けている。それは結局小説の分類を指すのである。私の考えでは、梁啓超の現実派小説と理想派小説の分け方に関して、坪内逍遙からの影響の可能性が考えられる。

他方、尾崎行雄からの影響も考えられる。尾崎行雄は1886年に『雪中梅』のために書いた「雪中梅序」中で次のように論じている。

同く小説なり、之を分ては Novel. Romance の二大品類と為る。Novelは何ぞ。人情を基本とし、新奇喜ぶべきの言行を構造して、之を潤飾し、而も荒誕不経に流れざる者、則ち是れ也。Romanceとは何ぞ。忽ちにして驚天動地の奇談、忽ちにして拔山倒河の言行、巧みに之を連綴して、敢て荒誕不経に流るるを忌まざる者、則ち是れなり。此書の如きは Novel の品類に属すべき者にして、意匠俊拔、措辞奇警、固より尋常小説家の企て及ぶ所に非ずと雖ども、一言一行悉く根底を世間実在の実態に占め、絶て空漠荒唐に渉る者なし。蓋し政治小説中の最も時事に適切なる者乎。³¹

尾崎行雄は、小説を理想派と写実派に分けているとともに、『雪中梅』を写実派小説に帰している。

『新中国未来記』は『雪中梅』をまねたと指摘されているうえに、梁啓超が日本語原本『雪中梅』を読んだらうとも指摘されている³²。したがって、梁啓超が、尾崎行雄の序を読んだ可能性は非常に高いと思われる。なお、尾崎行雄の数篇の文章が、『清議報』に

載ったこと³³、『雪中梅』の漢訳された広告も『新民叢報』に載せられたこと³⁴、なお、梁啓超が「自由書・普及文明之法」中でも『雪中梅』を紹介したことから見ても、尾崎行雄の「雪中梅序」を梁啓超が読んだ可能性は推測されよう。

なお、両者の内容から見れば、梁啓超の言う写実派と理想派とは、尾崎行雄の「Novel」「Romance」の分け方と全く同じ論理から出たように考えられる。梁啓超の「人を別の世界にみちびいて、その人が平常経験する空気を変換させるのである。」と、尾崎行雄の「忽ちにして驚天動地の奇談、忽ちにして拔山倒河の言行、巧みに之を連綴して、敢て荒誕不經に流るるを忌まざる者」という理想派に対しての描写、及び梁啓超の「哀れんだり、喜んだり、怨んだり、怒ったり、恋しがったり、驚いたり、心配したり、慚じたり」と、尾崎行雄の「人情を基本とし、新奇喜ぶべきの言行を構造して」という写実派に対しての描写は、ほぼ同質である。そのため、坪内逍遙からの影響の可能性が高いと言えるとするならば、尾崎行雄からの直接的影響の可能性は一層明確だと考えられる。

また、坪内逍遙、尾崎行雄の後になっても、理想と写実に関する論述は、絶えず議論されていた。例えば、石橋忍月は「想実論」中で、「想は虚像なり、実は真景なり、真景は捉ふべし、虚像は捉ふ可からず」³⁵と述べている。北村透谷は「内部生命論」中で、「所謂写実派なるものは、客観的に内部の生命を観察すべきものなり。」「所謂理想派なるものは、主観的に内部の生命を観察すべきものなり。」³⁶と述べている。前述のように、梁啓超の新知識の来源の一つであった『国民新聞』にも、山路愛山の「詩人論」が掲載されている。文章の中では、理想と写実について次のように詳しく述べられている。

曰く写実、曰く理想、派を分ち党を立つると雖も、畢竟するに専断の区分に過ぎざるのみ。所謂理想派と雖も、豈徒らに鏡花水月をのみ書く者ならんや、心中の事実、皎として明なる者を写すに過ぎざるのみ、然らば即ち是も亦写実派なり。所謂写実派と雖も、豈徒らに事の長さと物の広さと詳記して止む者ならんや、事の情と物の態とを抽きて之を写さざるを得ず、然らば即ち是も亦理想派なり。実中の虚、虚中の実、豈に截然として之を分つべけんや。之を分つは談理の弊なり。³⁷

田岡嶺雲は「写実と理想」中で、「写実とは形を写す所以なり、理想は神を傳ふる所以なり。」³⁸と述べている。

以上のような理想派と写実派に関する議論は、明治時代に文学論争らしい論争の一つであると言われる³⁹。このようなかつてあった大論争は、視野の広い梁啓超にとって、恐らく知らず知らずに自分の問題としてその影響を受けた可能性が高いと考えられる。

他方、日本において、初期政治小説は、理想主義であり、中期政治小説は写実的暴露的に描くものであった。「一つは自由民権の光明を目ざし、一つは自由民権の失敗を現実

に見てのものである」⁴⁰と指摘されているように、明治政治小説は、明と暗に分けられている。明は国会開設前に国会への憧れの理想であり、それは理想派政治小説である。暗は現実の国会への失望であり、つまり写実派小説である。明治政治小説を見通すことのできた梁啓超にとって、これも看過できなかつたであろう。要するに、「論小説与群治之関係」中の理想派と写実派の分け方は、明治小説理論から受容したものではないか、と考えられる。

6. おわりに

以上のように、清末政治小説の理論の形成における、明治政治小説界、及びその周辺理論との関係を考察してきた。以上の四点を考え合わせてみると、清末政治小説の理論における中核は、明治日本が及ぼした影響や啓発のうえに形成されたと言えるのだろう。横浜で創刊された『清議報』に掲載された漢訳『佳人奇遇』の序である「訳印政治小説序」は、清末中国における政治小説理論の出現を表わしている。なお、横浜で創刊された小説誌『新小説』における政治小説『新中国未来記』の連載、及び「論小説与群治之関係」の掲載は、清末政治小説の術語の定着、及び政治小説理論の正式な形成を表わしている。

つまり、清末政治小説理論は、梁啓超の日本亡命の賜物であり、特に明治政治小説界と切り離せないのである。言い換えると、清末政治小説理論の形成においては、明治日本の及ぼした影響がかなり強かつた。もしも、梁啓超の亡命先が日本でなかつたら、清末中国に政治小説が出現したかどうかは、知るよしが無い。

なお、明治日本の小説理論を受容したうえで形成された小説理論「論小説与群治之関係」は、成熟した政治小説理論であるのみならず、中国「小説界革命」の綱領的な性格を持つ文章となつた。それは小説の近代的な転化のために、基礎をしっかりと定めた。つまり、清末政治小説理論の出現とは、小説の地位が政治の助けによって文学中の最上乘の地位にまで高まる要因となつたのである。

注

- 1 『日本立憲政党新聞』明治16年6月9日、29日。底本は前掲『近代文学評論大系』第1巻明治期I（吉田精一、浅井清編集、角川書店1971年10月）による。なお、柳田泉『政治小説研究』上巻（春秋社、1967年8月p.234）によると、初の政治小説理論と考えられる。
- 2 浅井清「我国ニ自由ノ種子ヲ播殖スル一手段ハ稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルニ在リ・解題」前掲『近代文学評論大系』第1巻。
- 3 山田敬三「漢訳『佳人奇遇』の周辺——中国政治小説研究札記」（『神戸大学文学部紀要』第9号

- 1982年3月)、王曉平『近代中日文学交流史稿』(中華書局香港分局 1987年12月 p 224~227)、夏曉虹『覺世与伝世: 梁啓超の文学道路』(上海人民出版社 1991年8月 p 202)、黎躍進『外国文学新論』(学林出版社、1997年12月 p 313)に指摘がある。
- 4 「飲冰室自由書」『清議報』第26冊、1899年9月5日。
 - 5 「変法通議・論幼学」(『時務報』第18冊、1897年1月21日)文中では、「誨盜誨淫、不出二者」とあるが、しかしそれは「やや才能のある人(小有才之人)」の小説への批判のみで、古典小説への批判ではないと思われる。
 - 6 梁啓超作増田渉訳「小説と政治との関係について」『清末・五四前夜集』増田渉編平凡社 1963年8月。以下の引用もすべて増田渉の訳による。
 - 7 原文は漢文である。意味は、次のようである。「抑も東洋において、小説と称するものは、曰く『水滸伝』、曰く『西遊記』、曰く『金瓶梅』、曰く『八犬伝』である。然るに、『水滸伝』は草賊を伝えるにすぎなく、『西遊記』は妄談で道理がなく、『金瓶梅』は猥淫無雑で、『八犬伝』は怪しく乱れて荒唐、且つ踏襲の跡を免れない。皆、人を導き、世を治めるゆえんではない。柴君の『佳人之奇遇』はこれらの数種とは異なる。これはどうして読まないでおれようか。」
 - 8 前掲「飲冰室自由書」。
 - 9 各節はそれぞれ、『新民叢報』第1~12、14、16、19~20、24、26、28~29、38~39、40~41、46~49、62、72号に掲載されている。なお、狭間直樹「新民説略論」(狭間直樹編『梁啓超: 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房 1999年10月 p 80。)によると、「新民説」は、梁啓超が横浜で刊行した『新民叢報』誌上に掲載された。というより、梁は「新民説」を発表すべく該誌を創刊したのである。」したがって、新民が梁啓超にとっていかに重要であったかが、想像されよう。
 - 10 中江兆民「新民世界(一)」『東雲新聞』21号奇書欄、1888年2月14日、なお「新民世界(二)」は、同新聞第31号(1888年2月25日)の社説欄に掲載されたものである。『中江兆民全集』第11巻所収、岩波書店、1984年6月 p 66。傍点は省略。
 - 11 松永昌三『中江兆民評伝』岩波書店 1993年5月 p 230。
 - 12 宮村治雄『開国経験の思想史: 兆民と時代精神』東京大学出版会 1996年5月 p231~233。初出『中国——社会と文化』5号、1990年6月。
 - 13 宮村治雄「〈書〉と〈書簡〉のはざままで——『福澤論吉書簡集』から『梁啓超年譜長編』へ」『図書』(岩波書店) 658、2004年2月。
 - 14 詳しくは島田虔次「中国での兆民受容」(『隠者の尊重: 中国の歴史哲学』筑摩書房 1997年10月所収、初出『中江兆民全集第一巻・月報』2、1983年12月)を参照されたい。
 - 15 この文章は最初に『清議報』第98、99冊に掲載され、翌年「民約論鉅子盧梭之学説」と題して『新民叢報』第11、12号にも同文で掲載された。
 - 16 『新民叢報』第20号 1902年11月14日。
 - 17 例えば、「小説者、実文学之最上乘」(楚卿「論文学上小説之位置」『新小説』第7号、1903年9月)と、「小説、小説、誠文学界中之最上乘也」(陶曾祐「論小説之勢力及其影響」『遊戯世界』第1期、1906年9月)などがある。
 - 18 何徳功『中日啓蒙文学論』東方出版社 1995年1月 p 85。
 - 19 その類似性について、王曉平前掲書(p 228~230)と夏曉虹前掲書 p 218、219)は対比の角度から若干触れているが、日本からの影響関係に関しては、明確に述べられていない。

- 20 高田早苗「佳人之奇遇批評（上）」『中央學術雜誌』25号、1886年2月。底本は前掲『近代文学評論大系』第1巻。
- 21 不知庵主人（内田魯庵）「『浮城物語』を読む」『国民新聞』1890年5月23日。底本は『近代文学評論大系』第1巻。
- 22 夏曉虹前掲書（p 254）によると、1903年2月5日日付の徳富蘇峰への手紙に「日誦国民新聞、如与先生相晤対也」との話がある。
- 23 石川禎浩「梁啓超と文明の視座」（前掲『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』p 126）注21参照。なお、梁啓超の「自由書・無欲与多欲」は、1901年12月11日の『清議報』に掲載されたが、徳富蘇峰の「無欲と多欲」は、1901年12月1日の『国民新聞』に掲載された。そしてこの文章を収めている『第二日曜講壇』（民友社）は、1902年6月に刊行された。この時差から考えれば、梁啓超は日本到着後、日々刊行される『国民新聞』を直接に読んでいたと考えられる。そのため、「毎日『国民新聞』を朗読する」という発言は事実であったと考えられる。なお、石川禎浩同論文によると、梁啓超の他の二つの新知識の来源は、東京専門学校の教科書と『国民之友』である。
- 24 宮村治雄前掲書p 256、257参照。ただし、『清議報』連載開始号は、宮村論文では96冊とあるが誤植であり、実際は97冊である。
- 25 吉田精一、浅井清編集（前掲書）によれば、少なくとも十二回の論争文章がある。
- 26 「新中国未来記緒言」（『新小説』第1号、1902年11月14日）中の「余がこの書を著わそうとして、ここに五年になる」との証言による。
- 27 例えば、夏頌葉が『金陵買書記』（開明書店版1902年）では、「今小説界中若『黒奴吁天録』、若『新民報』之『十五豪傑』、吾可以百口保其必銷、『経国美談』次之。然龍溪固小説家之雄、如所撰『浮城物語』者、得詞章家以訳之、必有俾觀。」と述べている。なお、梁啓超主宰の『新民叢報』第25号（1903年2月）の「紹介新書」欄に『金陵買書記』を紹介した。しかも、同誌第28号（1903年3月）の「学界時評」欄にも、『金陵買書記』を大きく引用している。
- 28 斎藤希史『漢文脈の近代：清末＝明治の文学圏』名古屋大学出版会 2005年2月p 66、初出狭間直樹編『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房1999年10月。）は、次のように記している。「そしてそれにもとづいて小説のジャンルを大きく＜理想派小説＞と＜写実派小説＞とに分かつのは、ちょうど坪内逍遙のいう＜ロマンス＞と＜ノベル＞に対応し、おそらく何らかの経路で日本の文学評論を借りたものとも思われるのだが、その特徴を徹頭徹尾読者への効果に即して論じるのは、＜抑小説之支配人道也、復有四種力（小説が人間世界を支配するのには、四つの力がある）＞として仏教的概念を駆使して＜熏＞＜浸＞＜刺＞＜提＞の四つを挙げて詳細に論じるとあわせて、やはり独創としてよいだろう。」
- 29 何徳功前掲書p 85、86。ただし、何氏の指摘は漠然としており、詳しく論じられていない。
- 30 何徳功前掲書p 85。
- 31 尾崎行雄の「雪中梅序」は、1886年11月に発行された初版本『雪中梅』下巻に載せているが、しかし陳力衛の指摘（『『雪中梅』の中国語訳について—明治新漢語伝播の媒介としての役割』『文学研究』第93号 2005年4月）によると、尾崎行雄の序文は、1890年5月より、1912年の22版まで発行された改定増補版において、小説の冒頭に繰り上げられている。しかも熊垓の漢訳本はこの改定増補版が使われている。特に1896年の13版を使用した可能性があるとしてされている。その説にしたがえば、梁啓超も、この頃に発行された改定増補版における、繰り上がっ

ている尾崎の序文を読んだ可能性が更に強くなっていると思われる。なお、引用の仕方は、それぞれ旧仮名使いは現代仮名使いに、旧字体は新字体に改めた。

- 32 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』北京大学出版社、2003年7月p 41。
- 33 『清議報』第24、25冊に「論支那之命運」がある。第72冊に「清国処分如何」がある。第98冊に尾崎行雄演説「支那滅亡論」がある。
- 34 『新民叢報』第40、41合刊号「紹介新著」欄、1903年11月。
- 35 『江湖新聞』1890年3月。底本は福田清人編『山田美妙・石橋忍月・高瀬文淵集』筑摩書房 1971年8月。
- 36 『文学界』第5号、1893年5月。小田切秀雄編『北村透谷集』筑摩書房 1976年10月所収。
- 37 『国民新聞』1893年8月。底本は大久保利謙編『山路愛山集』筑摩書房 1965年10月。
- 38 『青年文』第2巻第5号、1895年12月。底本は西田勝編『田岡嶺雲全集』第1巻法政大学出版局 1873年2月。
- 39 十川信介（「想と実」『近代文学の成立期』学生社、1977年11月）によると、そのもう一つは、文学の効用の問題と、それに関連して、文学における題材の大小という問題である。しかも、その両方とも想と実の問題を軸にして展開して行くのが大きな特徴だと指摘している。
- 40 柳田泉「政治小説の一般」『明治政治小説集』（一）筑摩書房 1966年10月p 433。

付記

本稿は筆者の博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容——日中近代文学交流の一側面——』の第二章をもとに若干の加筆修正をしたものである。